

香川県庁舎東館

Kagawa Prefectural Government Office / East Building

時代の要請から生まれた 日本を表現するモダニズム建築

高松市の香川県庁舎東館は丹下健三の設計で昭和33(1958)年に竣工。日本の木造建築の意匠を取り入れ、芸術家と協働した空間や民主主義時代を象徴する開放的なピロティも備えた建物は丹下初期の傑作とされる。モダニズム建築20選にも選定されている。



東館高層棟ロビー。壁画がセンターコアを飾り建築と一体となって空間の価値を高めている。丹下研究室デザインの椅子が置かれ、人々が寛ぐ姿も見られる。



開放的なピロティが特徴の東館低層棟(手前)。人々はまちから自由に敷地に入り、高層棟や最奥の本館へも行ける。



ロビー前には、瀬戸内海や香川県の山並みを県産の庵治石(あじいし)などを使って表現した南庭が広がる。



猪熊弦一郎の壁画「和敬清寂」。「和敬清寂」は茶道の精神を表し、民主主義の思想にも通じるという。



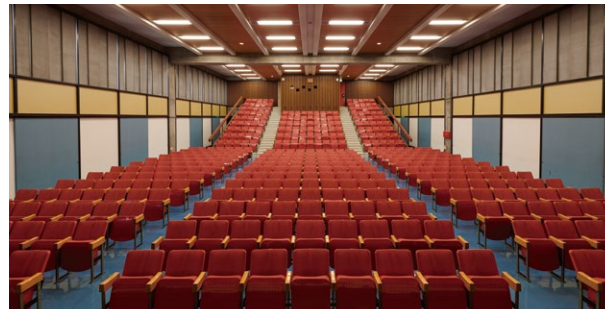
木造建築を思わせる小梁や手すりをコンクリートで表現した高層棟。等間隔に並ぶ厚さわずか114mmの小梁と、手すりのラインが目を引き。



日本の意匠を表す小梁は、屋内でも構造体であり自由な間取りを実現する機能も持つ。県庁の組織変更に対応する設計思想。



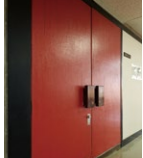
赤色、黄色がアクセントの塔屋。丹下が憧れたコルビュジエも原色を用いた。



桂離宮の襖の配色に似た水色と白色の引戸や無双窓風の外光調整用引戸がある県庁ホール。剣持勇デザインの客席や演台が今も使われている。



階段室の丸い吸気口。コアは空調機能も合わせ持つ。



県庁ホールの扉は香川漆芸の後藤塗。



県庁ホール前のホワイエ。美しくペイントされた木製棚は丹下研究室がデザインした。

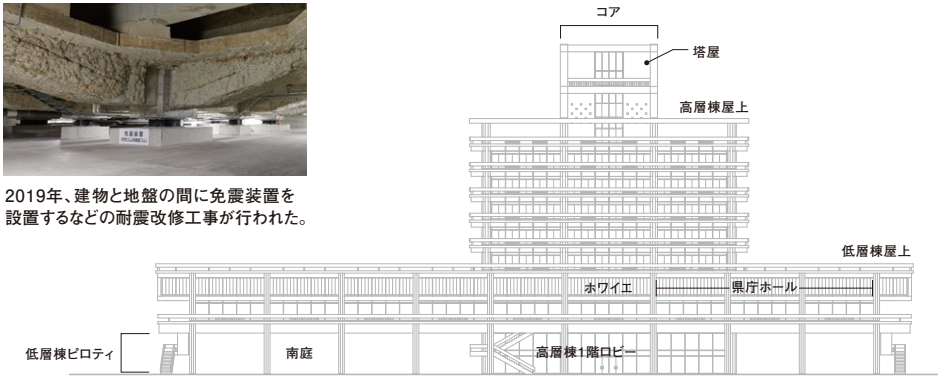
第二次世界大戦では高松市の約8割が焦土と化し、香川県庁舎も焼失。戦後の復興が進むなか、昭和33年に東館(高層棟・低層棟)が竣工した。当時は、新材料のコンクリート・鉄・ガラスを使ったモダニズム建築において日本らしさの表現を模索していた時代であった。丹下はル・コルビュジエが提唱した近代建築の五原則を採用した上で、高層棟各階にコンクリート製で水平線が際立つ手すりや、木組みを思わせる小梁、また、深い軒によって陰影が生まれる縁側のようなバルコニーなど、日本的な要素を取り込んでファサードを飾った。

低層棟には県庁ホールなどが入る建物を柱で持ち上げて高さのあるピロティを造っている。その姿は高床式建築のようで、まちとの境界に壁がないことから人々は自由にピロティ、南庭、全面ガラス張り的高層棟ロビーへ入っていける。戦前の庁舎が威圧的な建物であったのに対し、「民主主義時代の県庁として相応しいこと」という当時の金子正則県知事からの要請に応じて表現された。高層棟はエレベーターや階段を収めた耐震壁を建物中央に置くセンターコア・システムである。執務空間内には構造壁も柱もなく、

自由な間取りが可能となった。コアは構造体であり、設備上でも、また、人の動線が集約される点でもコアとして機能している。構造上の制約を受けず自由に立面を表現できたのもこのシステムによるものである。東館は戦後復興期に近代的技術と木造建築で培われた伝統的技術によって建設された。職人が手仕事で打設したコンクリートは強度を誇り、施工精度を高めた。その後の施設管理も良好で、60年余を経た今日も使用されている。2019年には耐震改修工事が完了。貴重な建築物は次世代へと受け継がれていく。



2019年、建物と地盤の間に免震装置を設置するなどの耐震改修工事が行われた。



用語説明

【モダニズム建築20選】DOCOMOMO(モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織)の「文化遺産としてのモダニズム建築20選」に選ばれた。

【ル・コルビュジエ】スイス生まれのフランスの建築家。近代建築の巨匠の一人。

【近代建築の五原則】モダニズム建築の理念の一つで、ピロティ、自由なファサード、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓の5要素をいう。

【猪熊弦一郎】香川県出身、日本のモダニズムを牽引した洋画家。建築家とのコラボレーション作品も数多く制作。

協力:香川県
〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

